美しくなつかしい、日本をのせて。

Cradle

［クレードル］出羽庄内地域文化情報誌

3

2013 March/April

TAKE FREE

NO.16

特集

庄内キネマストーリー

庄内憧憬

八神純子 シンガーソングライター

Cradle 3

美しくなつかしい、日本をのせて。

［クレードル］出羽庄内地域文化情報誌

2013 March/April

平成25年3月1日発行（隔月奇数月発行）第3巻4号（通巻16号）

発行／Cradle事務局　山形県鶴岡市山王町8-15（株式会社 出羽庄内地域デザイン）電話0235（64）0888

制作／Cradle編集部　山形県酒田市亀田2-59-3（コマツ・コーポレーション）電話0234（41）0012

FIDEA GROUP

酒田市／最上川堤防より鳥海山を望む

雪解けの庄内に　めぐり来る　春の便り

荘内銀行

これまでに立ったどのステージよりも温かい場所。

八神純子

みんなができること、得意とすることを生かして、
みんなで支え合う「羽黒あねちゃの店」。
今の日本の在るべき姿を見たような気がしました。

「『みずいろの雨』ならぬ『みずいろの飴』を作り、東北の応援をしましょう」。アル・ケッチァーノのシェフ奥田政行さんは、真面目な顔をしていつもお茶目な提案をしてきます。「みずいろの飴」ができたと思ったら、今度は「みずいろの雨のジュース」。3月11日に東京駅で開くチャリティーライブで発表できそうです。

彼との出会いは東日本大震災の2ヵ月後。音楽が大好きな奥田さんと、食べることが大好きな私とで、「お料理と音楽で、被災された方々にお腹と心を癒やしていただこう」と一緒に支援活動を始めました。あれから2年、それぞれ独自の活動もしながら、一緒にできることがあれば声を掛け合ってきました。

昨年末、かねてからの約束だった鶴岡市にある「羽黒あねちゃの店」でライブをしました。ご主人を亡くされ、お店を閉めようと考えていらした店のオーナー・佐藤典子さんが、奥田シェフや野菜の生産者の仲間たちに支えられ、続ける決心をされて頑張っていると聞き、歌を届けようと思ったのです。奥田シェフの運転する車で、真っ白な雪に覆われた畑の中にぽつんとたたずむお店に到着すると、あふれんばかりに集まっていた人たちが「わー」という歓声で迎えてくれました。

ブーツの雪を払い「お待たせしました！」と言いながら、八百屋さんを大きくしたようなお店に入ると…、真ん中に高さ20センチ、2メートル四方ほどの小さなステージが…。横に、臼の中で白い湯気を立てているお餅があり、周りを藤沢カブなど、色とりどりの在来野菜やラ・フランスが囲んでいました。これまでに立ったどのステージよりも温かい場所に思え、早くそこで歌いたい気持ちに駆られました。

「みずいろの雨」、「Mr. ブルー」、東北復興を祈る「翼」…。皆さんの表情は厳しくなったり、安堵したり、涙したり、笑ったり。一人ひとりの目を見つめながら歌うと、お互いの人生をほんの一瞬でも分かち合えた気がしました。最後は「パープルタウン」。皆さんの歌声と笑顔に触れ、歌を歌っていたことで、こんな繋がりが持てたことに本当に幸せを感じました。

歌った後はお腹が空きます。佐藤さんはそんな私を見透かすかのように、生産者の方々が持ち寄った手料理の芋煮、見たこともない山菜の煮付け、だだちゃ豆の甘煮、ピンクが鮮やかなカブの漬け物、大きなおにぎり、カリンッと甘い柿やりんごなどを次々と運んで来てくれました。つきたてのお餅は汁物、あっさりと甘く煮たあずきの2種類が出てきて、どちらをいただこうか？　と悩むこともなく両方をたいらげました。

みんなができること、得意とすることを生かして、みんなで支え合う「あねちゃの店」。今の日本の在るべき姿を見たような気がしました。

平成24年12月、鶴岡市の「羽黒あねちゃの店」にて。
写真左より八神さん、奥田シェフ、佐藤典子さん。
写真協力＝産経新聞社

やがみ・じゅんこ／シンガーソングライター。1958年、名古屋生市まれ。学生時代にヤマハのポピュラーソングコンテスト出場し、78年「思い出は美しすぎて」でデビュー。同年発売の「みずいろの雨」がオリコン最高2位となる。ヒット曲は「パープルタウン」など。87年に渡米し、ロサンゼルス在住。2011年から本格的に活動を再開し、東北支援活動も行っている。

Special Edition

庄内キネマ ストーリー

映画『おくりびと』や『十三人の刺客』、『山形スクリーム』…
今年2月下旬からはあの国民的人気ドラマの映画『おしん』の撮影が
進められるなど、庄内はさまざまな映画の撮影地となっています。
そんな地域で起きた、新たな映画のムーブメント。
同じ思いをスクリーンにかける熱き映画人たちが、ここ庄内から
明日の日本映画界を切り拓く道を築きはじめています。

映画スチール写真提供＝庄内キネマ製作委員会（伊藤いづみ撮影）

日本初の地方発信型 映画づくりプロジェクト 庄内で進行中。

山形、庄内ならではのオリジナル作品を、一流の映画監督を招いて庄内で作り、全国そして世界に発信する。
そんな壮大で夢のある活動が庄内で始まっています。

庄内発の映画製作を手掛けているのは、平成23年10月に発足した「庄内キネマ製作委員会（以下庄内キネマ）」です。昨年は作品を庄内で2本撮影し、現在はこの夏と秋に向けた公開を準備中。さらに今年は2本の撮影が予定されています。なぜ庄内でこのような動きが生まれたのでしょう。

庄内キネマを運営する組織のひとつは庄内映画村株式会社（以下映画村）」です。代表取締役社長の宇生（うじょう）雅明さんは、平成17年に全国公開した映画『蟬しぐれ』でプロデューサーを務め、翌年には鶴岡市羽黒町の松ヶ岡開墾場内に会社を設立、オープンセットの運営やロケ誘致に尽力してきました。その企画力や行動力は地元庄内や東京の映画業界を大きく巻き込み、映画『おくりびと』などを含む10数本の撮影支援を成功させています。「映画は俳優から製作スタッフ、エキストラ、食事や宿泊を用意する人まで、山ほど人が関わる総合産業です。この産業を通して庄内を元気にすることで、お世話になった皆さんに恩返しをしたいんです。実際、今までこちらにきた映画関係者は必ずといっていいほど皆さん庄内ファンになるんです」と宇生さん。

庄内と映画をつなぐこの動きを受け、平成22年には鶴岡市街地に映画館「鶴岡まちなかキネマ（以下まちキネ）」がオープン。運営する「株式会社まちづくり鶴岡」代表取締役の小林好雄さんは、「まちキネは映画による地域の活性化をコンセプトにオープン以来、地元撮影作品をはじめ、映画を映画館で観るという文化の普及に努めてきました」と語ります。

映画村による庄内の取り組みが広く業界に知れ渡るようになった頃、東京では日本の映画界を根底から変えようという新たな動きが起こりました。「株式会社映画24区（以下映画24区）」の設立です。代表取締役の三谷一夫さんは、銀行員時代にエンタメ系の会社支援を担当し、その後、映画製作会社で経営に携わりながら、日本の映画界が抱える問題を客観的に見つめてきました。映画24区は、そんな三谷さんの問題意識に賛同した映画人たちが集う場所。第一線で活躍する監督やシナリオライターなど多くの映画関係者がともに活動しています。

平成22年、三谷さんが初めて庄内を訪れました。「東京中心ではない映画事業を」との考えが一致した映画村と映画24区、まちキネはその後、ワークショップや映画の庄内撮影などを連携して進めるようになります。庄内キネマ発足の話は、こうした流れの中で持ち上がりました。三谷さんが当時のことを振り返ります。「数年前から地方で撮る映画が一種の流行になっていますが、結局は東京の製作会社が俳優やスタッフを連れていって場所だけ使って終わるため、地元には何も残らないんですね。ただ庄内の場合は、映画村の映画を作る動きと、まちキネの映画を観せる動きがあって、しかも映画村のエキストラが2500人もいるなど地域で映画づくりを支える土台がある。これは全国的にとても異例なことです。あとは力のある俳優やシナリオライターが地元から生まれてくる学びの場と、映画を撮る有能な監督がいれば映画が作れるわけです。だから、うちと以前からつきあいのある鶴岡市出身の映画監督、冨樫森（しん）さんが庄内に向けて動き出した時に、これはいけるかなと思いましたね」。

宇生雅明さん（右）
Masaaki Ujo
庄内映画村株式会社
代表取締役社長

山梨県在住。平成18年、庄内映画村（株）を設立。山梨と東京、庄内を行き来しながらロケ誘致と観光事業に取り組んでいる。

三谷一夫さん（中央）
Kazuo Mitani
株式会社映画24区
代表取締役

東京都在住。平成21年、（株）映画24区を設立。東京中心の映画ビジネスを根底から覆そうと、地域での映画人育成事業を全国で展開している。

小林好雄さん（左）
Yoshio Kobayashi
株式会社まちづくり鶴岡
代表取締役

鶴岡市在住。鶴岡まちなかキネマを運営。さまざまな地域活性化事業に携わり、本誌編集長も兼任している。

庄内キネマ製作委員会

全国初、地方発信型の映画製作プロジェクトを進める、3つの組織。

庄内映画村

ロケ誘致と観光による地域活性化を目的に、これまでに『おくりびと』『ICHI』など10数本の映画撮影を支援。月山麓の庄内映画村オープンセットは、ロケ地としてだけでなく、松ヶ岡開墾場内の庄内映画村資料館と合わせ、鶴岡を代表する観光地になっている。両施設とも冬季間は休業中。開館情報などはHP「庄内映画村」へ。
所本社：鶴岡市羽黒町松ヶ岡字松ヶ岡29
☎0235-62-2080

映画24区

「映画人たちが集う新しい場所」とのコンセプトのもと、映画製作・配給を行いながら、第一線で活躍する映画監督やシナリオライターなどが講師を務める人材育成ワークショップを開催。最近は、地方での映画プロジェクトも展開中。
所本社：東京都渋谷区千駄ヶ谷3-20-8
千駄ヶ谷 S'ビルB1
☎03-3497-8824

鶴岡まちなかキネマ

平成22年にオープンした鶴岡では8年ぶりとなる映画館。昭和初期の木造絹織物工場を活かした木の温もりある館は4スクリーンを備え、最新作からこだわり作品まで幅広く上映。上映情報はHPで確認を。
所鶴岡市山王町13-36
☎0235-35-1228

俳優、製作スタッフ シナリオライター。 庄内キネマの映画人育成。

せっかく映画を作るなら、ストーリーも人材も
オリジナルを目指して。映画24区の広範な
ネットワークを活かした人材育成の姿をご紹介。

庄内キネマの具体的な活動は、山形、庄内の地域資源が生かされた作品を、年2本の割合で製作することです。実際進めるにあたっては、作品を担当する監督が事前に俳優ワークショップとオーディションを行って出演者を決定、庄内で撮影を行います。「庄内キネマの一番のコンセプトは、映画文化を育てること。それには映画を観る、演じる、作るというそれぞれが必要になります。そのため私たちは脚本家や俳優、製作スタッフなど、映画人の育成に力を入れています」と宇生さん。

俳優ワークショップ

庄内キネマが今までに開いた俳優ワークショップは、1作目の冨樫森監督と2作目の三原光尋（みつひろ）監督による全2回。3回目は、3作目を担当する宮田宗吉（そうきち）監督がこの3月に行います。参加者は5歳から70代までの20〜30人。映画村のエキストラや演技初心者などさまざまな人が公募で集まります。カリキュラムは三谷さんと監督が相談しながら決定。冨樫監督は第1回作品の台本を渡して直接演技を指導、三原監督は猿のモノマネなど即興的な演技指導を行いました。

平成24年9月に鶴岡市の羽黒コミュニティセンターで開催された脚本家、大前玲子先生のシナリオワークショップ。脚本の基礎を楽しく学ぶ。

そしてオーディションはワークショップの参加者に優先的にご案内。イメージが合えばその場で声がかかることもあります。「第一線で活躍する監督が、参加者とあんなに丁寧に向き合いながら映画を作り上げるなんて、普通はないです。ましてや1作目の作品のように、ワークショップの一般参加者が主役に抜擢されるなんて、全国から集まった俳優志望者がしのぎを削り合う東京では、考えられないことです」と三谷さん。

製作スタッフたち。映画『剱岳 点の記』で日本アカデミー賞録音優秀賞を受賞した酒田市在住の石寺健一さんも、録音スタッフとして現場に参加。

映画の脚本家を育てるシナリオワークショップも1作品につき1回開かれています。「講師の大前玲子先生は、東京では指導を受けるのに3年半待ちという人気の脚本家です。この3月にも来てもらいますが、庄内は俳優、脚本家とも、すごく理想的な教育環境が整いつつあると思いますね」。

実際の撮影現場も人材を育てる大切な場です。東北芸術工科大学から機材サポートを受けて撮影する現場には、同大学映像学科の学生が参加。ゼミを担当する映画監督の前田哲さんから、「現場に入った学生は大きく成長する」とお墨付きをもらっています。

プロが先生となり、新人や若手にも積極的に現場を経験させる庄内キネマに、最近また新たな動きが起こり始めました。冨樫監督が映画『おしん』の監督に起用され、冨樫監督と組んだ1作目の新人俳優や製作スタッフも同じように『おしん』に大抜擢されたのです。「すごくいい流れだと思いますね。今、庄内キネマは東京でかなり注目されています。一流の監督が庄内に行くし、実際に映画を撮るし、俳優たちも2作目の東京オーディションに300人集まったように、庄内に行って映画を学びたいという子が増えています」。

地方での映画づくりが庄内から広がって、日本の映画文化が高まる―。そんな日が訪れる時も、そう遠くないのかもしれません。

橋本せつさん
Setsu Hashimoto
『夏がはじまる』祖母イノ役
鶴岡市在住

初めてセリフを声にした時の気持ちは忘れられません。とても重くて、大切な一言でしたから。過去の演技経験は友人の劇団のお手伝い程度。監督から「そのままでいい」と言われてすごく楽になったのを覚えています。この映画で描かれているのは人の人生。きっと世代ごとに共感できる部分があると思います。ぜひ見ていただきたいですが、見るだけでなく出演者として映画に参加するのはもっとおすすめ！ スクリーンに映った瞬間を誰かと共有できたらさらに楽しくなりますよ。

My Cinema Story

難役を演じた橋本さんは映画村エキストラの常連
「映画に参加する楽しさを皆さんに知ってほしい」

中島唯さん
Yui Nakajima
『夏がはじまる』『乙女のレシピ』録音助手
東北芸術工科大学映像学科4年

1作目では録音技師の石寺健一さんの助手を、2作目は最後の2日間だけ石寺さんの代理をさせていただきました。現場は学校で学んだことが真っ白になってしまうほど衝撃的な場所でした。プロの現場の迫力は絶対に忘れられないと思います。一緒に参加した仲間もいつもと違う表情でした。ほぼ初対面同士のスタッフが、それぞれの部署にプライドを持ちながらお互いを信じて仕事を進め、一本の作品を作っていく。今回の参加は、そのすごさを実感する体験となりました。

My Cinema Story

現場は、学校で学んだことが
真っ白になってしまうほど衝撃的でした。

庄内キネマ ストーリー Special Edition

庄内キネマ第1回作品

夏がはじまる

今の時代に庄内から贈る「家族」の絆の物語。

「家族」という普遍的なテーマに個々の人生を重ねた
ひとつの群像劇。いよいよこの夏、封切りです。

スクリーンに映し出される、農村や海辺の風景、人々の日常。庄内キネマが1作目の題材に選んだのは、庄内の風土と人に焦点をあてた、3世代の家族の物語です。

1作目の構想が持ち上がったのは平成23年。〝庄内発〟の映画企画として、監督は鶴岡市出身の冨樫森さんに決定。監督は以前から映画24区と親交があり、この年、同社の配給で庄内を舞台にした映画『傷跡』を手がけたばかりでした。ストーリーは、冨樫監督が代表作『あの空をおぼえてる』で見せた家族の崩壊と再生、そして人物の緻密な心を描写したオリジナル脚本となっています。

そしてこの年の5月に、第1回の「映画俳優ワークショップ in 山形」を、羽黒コミセンで開催。冨樫監督が講師を務め、小学生から70代まで、演技はまったくの未経験という人たちも含む参加者たちが集いました。

オーディションは昨年4月。主要キャスト4名中3名が映画初出演。ワークショップやエキストラの経験がいきた結果に。

冨樫監督のワークショップは、あらかじめ渡された台本から一つのセリフを思ったように演じるだけ。最初はたどたどしい口ぶりだった参加者たちも、冨樫監督の「今、どんな気持ちになりましたか？」という問いかけから対話を重ねるうち、自分の感情が呼び起こされて、たちまち演じることに夢中になっていったといいます。

「たぶん参加したみんなが、これは面白い！ って思ったはずです。冨樫監督は自分が思う画をつくるのではなく、役者の感情にそって画をつくっていく感じですね」と話すのは、初回ワークショップから参加し、本作で見事主役の藤崎ななえ役に抜擢された齋藤絵美さん。全3回の講座を経て行われた地元オーディションには、ワークショップ参加者も多く挑み、齋藤さんをはじめ庄内在住の一般の方たちが主要キャストに多く選ばれました。

主要キャストのほとんどは本格的な演技経験の少ないメンバーだったため、冨樫監督は撮影が始まる1ヵ月前から毎週、庄内に足を運び、稽古に付き添ったといいます。そうして平成24年6月にクランクイン。ロケは鶴岡市の櫛引、藤島、鼠ヶ関地区の民家や漬物工場などで行われました。限られた人数で、実際の現場は初めてというスタッフも多い中、出演、制作を問わず自然と作業を助け合う空気が生まれていきました。こうして「冨樫組」が一つになって完成させた作品は、今年の初夏に公開され、山形県内、東京、大阪などで順次上映される予定です。

第1作から庄内キネマ作品のプロデューサーを務める映画村の丸山典由喜（のりゆき）さんにゼロからの映画製作について伺うと「庄内キネマの映画づくりは、人材育成が理念。東京でも評価されるぐらいの俳優やスタッフに育て上げる、いわば人づくりでもあるんです」。

〝庄内を映画の街に〟希望に満ちた物語がこの夏、幕を開けます。

キャスト
監督/冨樫森
出演/齋藤絵美、佐久間利彦、
菅原比路美、朝倉冠子、
橋本せつ、梨乃ほか
脚本/松本めぐみ
脚本協力/五十嵐愛
撮影/鈴木周一郎（JSC）
録音/石寺健一
助監督・編集/宮田宗吉
音楽/碇英記
制作/柴田啓佑
演出助手/安河内瑠美

12月にはまちキネで関係者試写会が行われ、冨樫監督、出演者が久しぶりに再会。温かな余韻を残す作品に、客席からは大きな拍手が。

庄内キネマストーリー Special Edition

第1作のヒロインに選ばれた齋藤さんは、この出演をきっかけに、映画『おしん』への出演も決定。

齋藤絵美さん
Emi Saito
主演 藤崎ななえ役/酒田市在住

高校生の時に3年間、演劇部に所属していました。今回の映画の撮影は最初から最後まで本当に楽しくて、演じる楽しさから生まれる自分の感情があったり、冨樫監督がセリフと私（ななえ）の気持ちを同調させてくれたり、ロケ地の藤崎家に寝泊りさせてもらったりと、すべての環境が私をななえにしてくれたと思っています。「一つのものをみんなでつくる現場に携わっていたい」そう思って参加した映画づくり。今の目標は、庄内キネマの全作品に出ることです（笑）！

庄内の今を映した、誰にでもある物語をつくりました。
映画づくりがこの土地の誇りになれば嬉しいです。

冨樫森さん
Shin Togashi
映画監督

鶴岡市（旧藤島町）出身。平成13年に『非・バランス』で長編デビュー。その後『星に願いを。』『ごめん』などの代表作を手がける。平成20年『あの空をおぼえてる』でフランスKinotayo（金の太陽）映画祭グランプリを受賞。

自分が生まれた場所で映画を撮れるなんて本当に素晴らしいことです。地方でこれだけレベルの高いことをやっていて、それが庄内の人たちにとって誇りになってくれたらと願って撮影に臨みました。今回の作品では、今僕が見ている庄内の姿を映しこんでいます。セリフも生活の中で各世代が使っている言葉をあえて採用しました。映画の面白さは、人とつくること。自分が描いていた想像を超える、別のものができあがることがやっぱり面白いんです。この映画も、庄内の人たちの感性を集めた大切な一作になりました。

県内ロードショー 6月15日（土）公開！

発表が待たれていた公開日がついに決定！
まちキネでは前売特別鑑賞券を発売中です。
（1000円 ※当日一般1500円のところ）

My Cinema Story

庄内キネマ第2回作品

乙女のレシピ

「庄内の食」がテーマの女子高生、青春ムービー。

庄内キネマ2作目は、笑いありミュージカルありの
元気が出る美味しい話。今秋、公開予定です。

料理部の存続がかかる、年に一度の料理コンテスト。大会前日、強豪チームとレシピがかぶっていると知った4人の女子部員は、リーダーの妹も巻き込んで究極のレシピ作りに挑戦！ 庄内キネマ第2回作品は、女子高生たちが庄内を舞台にくり広げる、つや姫を使った炊き込みご飯の物語です。

監督は、藤竜也と中谷美紀主演の前作『しあわせのかおり』で、小さな中華料理店を舞台に、温かな物語を描いた三原光尋さん。脚本は、製作に向けて行った全国公募で入賞した小森まきさんが、三原監督と練り上げました。

キャスト
監督/三原光尋
出演/金澤美穂、城戸愛莉、秋月三佳、渡辺恵伶奈、優希美青ほか
脚本/小森まき
撮影/吉田剛毅
照明/羽賀威仁
録音/石寺健一
助監督/柴田啓佑
音楽/遠藤浩二
編集/奥田朋恵

羽黒高校の調理室でのロケ風景。乙女たちへの料理指導は、三原監督作品『しあわせのかおり』でも指導を担当した料理研究家の高城順子さん。

平成24年9月に開催した三原監督の俳優ワークショップは、初級・中級クラスに分かれてレッスン。県内外から参加者が集まった。

メインキャストの女子高校生は、東京オーディションで選ばれた金澤美穂さん、城戸愛莉さん、秋月三佳さん、渡辺恵伶奈さんの4名で、皆さんすでに映画やドラマの出演経験をもつ若手女優です。昨年「ホリプロタレントスカウトキャラバン」でグランプリに輝いた山形県出身の新人女優、優希美青さんも、リーダーの妹役として映画に初出演しました。「メインの女子高生役4人はもともと地元で選ぶ予定だったのですが、該当する年代の子があまり集まらなかったので、急きょ東京オーディションを開くことにしました。でもまさか300名も集まるとは思いませんでしたね。結果的にプロダクションに所属する若手女優に決まったわけですが、その中でも彼女たちは〝庄内らしい素朴な雰囲気を持つ女の子〟という観点で選ばれた女優さんたちです」とプロデューサーの丸山典由喜さん。

撮影は昨年11月末、羽黒高等学校を中心に庄内浜や酒造会社、庄内映画村オープンセットなどで1週間ほど行われました。地元エキストラが100名ほど参加するなど、出演者数、製作スタッフ数とも1作目を上回るスケールです。

また「庄内の食」がテーマの作品だけあって、劇中には地元食材が盛りだくさん。つや姫を使った炊き込みご飯を中心に、もってのほかなどの在来野菜や旬食材、地元加工品など、庄内の美味しいものが豊富に詰め込まれています。食べることが大好きという三原監督は「初めて庄内に来た時は、とにかくいろんなものを食べて、〝庄内はものすごく美味しい〟と驚いたので、その感動を映画で表現できたらと思いました。食べもの以外にも、平野を取り囲む山々や田んぼのあぜ道、羽黒の大鳥居など庄内らしい風土感をたくさん取り入れています。地域の魅力を広く発信できる作品ができたと思いますね」と語ります。

庄内浜でハワイアンを踊ったり、侍に扮して刀を振ったり。乙女5人が庄内中を駆け回る『乙女のレシピ』は現在、編集作業も終わって最後の仕上げに入るそう。公開は試写会を経て今秋、鶴岡まちなかキネマから。その後は全国上映を目指します。庄内の美味しさが詰まった映画に、乞うご期待。

My Cinema Story

「第37回ホリプロタレントスカウトキャラバン」グランプリの優希さんが、本作で映画デビュー。

つや姫をはじめ、さまざまな美味しい食にあふれた庄内。
その地域性がたくさん詰まった楽しい映画です。

優希美青さん
Mio Yuki
ヒロインの妹役／山形県出身タレント

地元山形が舞台の映画に出演すると決まった時はとても嬉しかったです。現場では、初めての映画撮影だった私に皆さんが親切に教えてくださったので、いろいろと覚えることができました。その経験のおかげでその後、主演をいただいた映画では不安なく撮影に臨めました。ロケ中には、偶然お会いしたおばあさんから自畑の庄内柿をいただいてとても美味しかったです。優しい人が多いなあと思いました。これからも皆さんから元気になっていただける女優を目指して、山形のお米をたくさん食べてがんばりたいです。

三原光尋さん
Mitsuhiro Mihara
映画監督

福岡アジア映画祭グランプリ、大阪映画祭新人監督賞。平成16年の『村の写真集』では、上海国際映画祭グランプリ・最優秀主演男優賞（藤竜也）。前作『しあわせのかおり』は、鮮烈なる中華料理の映像美で観客を魅了した。

庄内の食を美味しそうに撮ってくれそうな監督ということで、声がかかりました。初めて庄内を訪れたのはそれ以前の2年前です。三谷さんから誘われて行ったのですが、庄内が海の幸も山の幸もこんなに美味しいところとは知りませんでした。特にお米ですね。なので今回の作品は、生産者が育てた食材をどれだけ大切に食べるかという“食に対する愛情”をテーマに、とにかく美味しくて楽しい映画を作ろうと心がけました。ミュージカルや時代劇、庄内浜でハワイ演出ありの、あの手この手を使ったエンターテインメントです。

NEWS!

宮田宗吉監督による庄内キネマ第3回作品も今春から製作スタート!

第3回作品のテーマは「加茂水族館のクラゲ」。リニューアル前の水族館を舞台にしたラブストーリーを、冨樫森監督の『夏がはじまる』で助監督を務めた宮田宗吉監督が手がけます。3月にワークショップを開催し、オーディションを経てクランクイン。詳しくはHP「庄内キネマ製作委員会」まで。

庄内キネマ ストーリー Special Edition

庄内写真季行 12

鶴岡市湯田川

一本の大きな枝垂桜と過ごす、ゆったりとした春の流れ。

3ヘクタールもの広さをもつ湯田川温泉梅林公園では、約300本の梅の花が毎年、可憐にそして慎ましげに咲き競う。開花は例年3月下旬から4月下旬まで。それに合わせて公園では、湯田川温泉観光協会主催の「梅まつり」が開催され、庄内の春を愛でるように多くの人々が訪れる。

その賑わいが落ち着き、公園に再び静けさが訪れる頃、大きな一本の枝垂れ桜が、誰に自慢するでもなく咲き誇る。そのことを知る人は意外と少ない。

「湯田川温泉梅林公園」
写真・文＝東海林晴哉
モデル＝庄司七恵

製作年代　明治の終わり〜大正初め

酒田の鵜渡川原人形

丸みがかった朴訥なフォルムと
柔らかくて温かな色彩。懐かしくて
愛らしい土人形は、江戸末期から庶民の間で
受け継がれてきた、酒田の郷土玩具。

子どもの健やかな成長を願って人形を飾る―。古くから伝わってきたこの風習は、江戸後期、土人形の産地が全国に広まることで庶民にも根づいた。人々は、身近な材料で作られた素朴な人形をわが子のために買い求め、愛でてきたのである。

産地名が後にそのまま名称となった鵜渡川原（うどがわら）人形は、江戸末期、地域で鋳物業を営む大石家がほかの産地の人形を元に作り始めた。その後、大石家の本家も分家もオリジナルの型を次々と創作。昭和初期には、籠を背負った売り子商いが、大石家から仕入れた人形を各家々に売り歩いたという。戦後に全国の土人形が次々に姿を消す時代の流れの中で、平成に入ると鵜渡川原人形にもその波が押し寄せた。だが、ふるさとの土人形を愛する人々が立ち上がり、保存活動が始まった。

まず人々が取り組んだのは、土人形の命ともいえる「型」づくりだ。受け継がれてきた木製の型や土型をもとに石膏で作り直し、型を失ったものや新たに発掘したものは人形から型を起こした。そうして手がけた型は100種以上。色付けは、全国的にアクリル絵の具が主流の中で、顔料を膠（にかわ）で溶かしながら描く、昔ながらの方法を継承している。そして、伝統文化を伝えるための展示会や体験教室を随時開催。近年は、伝統的な色使いに着目する慶應義塾大学教授、横山千晶さんの力添えもあり、同大学日吉キャンパスで展示会やワークショップ・講演会などが開催されている。

お内裏さまに立ち犬やお福さん。小さな幸福感を私たちに与えてくれる鵜渡川原人形は、名もなき作り手たちの、大きな愛情に包まれている。

1850年頃に鵜渡川原村の大石助右エ門が始めた鵜渡川原人形は、平成9年に酒田市が人形製作の体験教室を開催したことを機に、「鵜渡川原人形保存会」が結成され、保存活動が開始。その後、名称を「鵜渡川原人形伝承の会」に変更した同会では、本家の大石やゑさんから正式認定を受けた本間光枝さんと松浦正子さんが中心となり、昔ながらの作り方の伝承や普及活動に励んでいる。

お問い合わせ　0234-31-2008（伝承の会）

特別企画 庄内俳句紀行

風光る桜の小路を歩く

待ちわびていた春が
ようやく庄内にも訪れると、
里も野山も次々に色めき、
花々が喜びと儚さを運んで咲き出す。
なかでも桜は、
古から人々の心の花とも言われてきた。

さくらの「さ」は田の神・穀霊、「くら」は神のいる場所という意味があり、「さくら」は田の神が山から里に降りてくるときにいったん留まる依代の木を表した言葉だという。

花待ちのこころになにも加へざる —敦子

「日本さくら名所百選」に選ばれている鶴岡公園には、ソメイヨシノをはじめ、八重桜、枝垂桜など七三〇本もの桜が咲き乱れる。夕暮れ時、お濠の脇にある桜の小路を歩くと、夕陽に透ける桜の花びらは、まるで誰かを想って頬を染めているようだ。夜桜は、なお美しい。花の下に綺麗に並んだ雪洞が、水面に浮く花びらと一緒にあやしく揺れる。

雪洞をかざせば花の梢かな —泉鏡花

残雪を頂く鳥海山、雪解水が流れる清流洗沢川、その川沿いにある六〇本あまりの桜は、昭和三十四年に皇太子（現在の明仁天皇）御成婚記念として植栽されたもので、樹齢五〇年を越える壮木ばかり。この清流を渡る風に鯉のぼりが泳ぎ、その川沿いには昔ながらの石垣の護岸と、黒瓦、黒板、白壁で造られた庄内らしい家並みを見ることができる。

初めて見るのにどこか懐かしさを思わせる日本の原風景的な桜並木が、ここには広がる。まるで鳥海山の残雪から雪のように散りくる桜吹雪は、時間を忘れてしまうほど見事である。

鳥海山の雪のごとくに散る桜 —敦子

庄内で最も桜の花の美しい場所の一つに、国指定史跡の松ヶ岡開墾場を忘れてはならないであろう。大正一〇年に開墾創業五〇周年を記念して植えられたソメイヨシノの桜並木や、本陣脇の少し早咲きの大山桜など、現在では四月中旬から下旬にかけて約五〇本が咲く。

歴史的佇まいの中にある五棟の大蚕室を背に、道の両側から枝を伸ばす満開の桜並木を歩くと、淡く優しい春の光の中にも、刀を鍬にかえ荒野を開拓した旧藩士の気概を感じることができる。一度は訪れてほしい場所だ。

まぼろしの花湧く花のさかりかな —上田五千石

「日本の都市公園百選」に選ばれている酒田市の日和山公園の桜は、公園のシンボルである千石船を、まるで花の波に浮かべるかのように咲き誇る。日本最古の木造六角灯台から日本海を望みながら、爛漫と咲く中を歩くと、北前船交易で栄華を誇った往時の姿が偲ばれる。

花追い人のごとく出羽の桜を巡り歩くと、初めて見る人にも懐かしさを感じさせると共に、忘れていたさまざまな思いがどこからか運ばれてくるようだ。

さまざまの事思ひだす桜かな —芭蕉

写真・文＝俵谷敦子（月刊俳誌「月の匣」同人）

松ヶ岡開墾場の桜

夕陽に染まる桜

鶴岡公園の桜の小路

Cradle 旅行倶楽部

「日和山春景」佐々木吉治 氏

庄内 さくら巡り

残雪に薫る凛とした桜

「東北・夢街道」に選定された桜名所を巡ります

鶴岡公園～松ヶ岡開墾場～温海川河畔～洗沢川の桜並木～日和山公園

「城下町鶴岡」「湊町酒田」の歴史・文化を訪ねます

致道博物館～藤沢周平記念館～松ヶ岡開墾記念館～本間美術館

ご宿泊は老舗旅館 あつみ温泉「萬国屋」

4/23（火）～24（水）

★限定20名様 最少催行人数15名

■ツアー代金

お一人様 25,800円 <クレードルサポーター割引> 23,800円

○現地バス、宿泊（4名1室）、昼食、入場料、ガイド料含
※現地までの交通費は含まれておりません。
※現地より係員がご案内いたします。

温海川河畔

■お問い合わせ

通話無料 0800-800-0806

庄内 クレードル 検索

＜旅行企画・実施＞
〒997-0028 山形県鶴岡市山王町 8-15
株式会社 出羽庄内地域デザイン
山形県知事登録旅行業第 2-268 号